

第6分科会 まとめの部



(司会・まとめ)

長崎大学副学長 (国際担当)・留学生センター長

小路 武彦 氏

東京大学本部教育・学生支援系留学生支援グループ長

安保 忠明 氏

【第6分科会まとめ】

【小路】 A班の協議をまとめますと、テーマは「留学生の入学選抜」ということですが、入学選抜といえば渡日前入試ということが頭にまず浮かびます。その具体的な方策としては日本留学試験がありますが、この日本留学試験については、特に中国などでは、開催されていないということや、実際日本における留学生の多くの方が中国から来られているということを考えますと、極めて不備であることが認識されます。またこの際、学歴や資格の認証が大きな課題となっております。

しかし考えてみると、日本の大学への入学の仕方には多様なパスウェイがあるということです。その1つは日本語学校との連携です。日本語学校の場合には、現地学校との密接な提携によりまして、学生の履歴、成績等の個人情報についての信用度が高いということで、日本語学校を卒業した学生を積極的に採って頂ければ、また更に日本語学校をうまく活用して頂ければ、この種の多くの困難な問題を難なくクリアして、質の高い学生が採れるだろうということが、力強く議論されたところです。

また、短期大学や他の留学生用専修学校、あるいは現地の海外留学を目的とする学校もありまして、こちらもやはり様々な資格の認証には非常に努力されていて、それぞれ独自の手段を使って行われている。したがって、そういう短大あるいは専修学校の場合には、大学への編入制度の活用について提案があったと思います。

そして更に学歴や資格の認証に関する問題ですが、認証制度については、先ほど太田先生からもお話がありました様に、FCE やその世界的ネットワークである ENIC-NARIC Net 等々との連携や、文部科学省を含む日本の教育機関がそういった制度に加入していくということも必要と思われます。説明はありませんでしたが、中国に対しては JAFSA という制度が使われてもいいのではないかとということもおそらく提案される予定であったのではないかと思います。

更に加えますに、直接現地から留学生を選抜するという点に関して、例えば中国なら非常に優秀な学校も多数あるということで、そういう学校から直接採用してくることもひとつの方法であると思われます。入学試験を日本独自に行うのではなく、中国の統一試験結果を信用し、中国の制度を認めた上で学生を評価・入学させる制度も考えるべきだろうということです。このような制度の導入には、やはり認証の問題、言い換えますと信用できるかどうかについてが最大のポイントと思われますが、制度が公的に確立されたものについては、もっと大学も積極的に利用すべきであろうと考えます。以上です。

【安保】 B班の協議をまとめますと構成から考えまして、国立大学、私立大学、日本語学校、専門学校、それから企業という構成で、留学生の入学選抜というカテゴリで議論をしようとしても、なかなかお互いの立場もありますし、大学その他の規模感もありますし、考え方もありますので、その辺のところは統一的な見解は難しいと思っております。

ただ日本語学校の要望としては、A 班と同じように、自分たちが受け入れている学生は、日本語能力に対してはとても優秀な学生を選抜して入れているということもあり、大学と今後は連携をして、多く進学させたいというニーズが高いものがありますので、その辺のところは私学、国立も含め、連携をとって、その優秀な学生を上レベルの教育にどんどん上げていきたいという要望が強く出されております。

また企業側からすれば、日本語ができないとやはり厳しいと言わざるを得ません。どうしても日本語ができないと日本企業で働くのは厳しいことになります。あまり採る数も少なくなってきました。一方で、グローバル 30 の中で英語によるプログラム、英語で学位が取れるプログラムが文科省の指導のもと、今後はどんどん増やしていかなければいけないという指導が入っております。いずれにしろ、生活をする面では、日本という国に来るわけですから、日本語というハードルはとても高いのですが、日本語ができないとどうしようもないという状況もあります。

それから、先生がおっしゃっていた FCE や外国の学歴、資格評価など、そういうものも導入して、選抜をもう少し軽減する、証明書とかそういうものを真剣にながめるのではなくて、そういう認証評価の機関を利用して、もう少し面接を重視するとか、そういう意味で人物評価をしていったほうが、より効果は上がるのではないかと思います。

それから御多分に漏れず、各大学、それから日本語学校、専門学校ともに、中国の方が圧倒的に多いということもあり、資料の後半部分に、JAFSA が今後展開しようという中国学位・学歴認証システム登録のご案内というのがありますので、今後は国立大学、私学ともにこういう制度を導入して、質を高める。あまり虚偽の証明書がついている留学生を採ることなく、質の保証された留学生を採ってきたいという希望もありました。

あと渡日前でどういう人たちを中心に採りたいと大学は望んでいるかという質問もありましたが、学部をある程度重点的に採る大学、それから大学院生を重点的に採りたいという大学は、やっぱりまちまちだと思います。どの大学もアドミッション・ポリシーというものがある程度示されていると思われ、それに基づいて入学者選抜を行っているわけですが、そういう中で、自分たちの大学がなすべき使命というものは果たしていかないと、企業もそういうところを見ていると感じます。以上です。

【太田】 最後に私が本日申し上げた入学選抜の手法については、全部このやり方に従うようにと言っているわけではありません。多様化していく中の 1 つのやり方を提示しました。私自身は、日本の留学生受入れの基本は、日本語学校と大学の連携が最も重要だと考えています。日本語学校のほうが大学よりも、さまざまな渡日前入学許可のノウハウもありますし、もちろん日本語教育力もあります。日本語学校に行った留学生の満足度が非常に高いということもデータに出ていますので、それが留学生受入れの基本ルートだと思います。

それから先ほどアドミッション・ポリシーのことが出ましたが、アメリカでは今、Enrollment Management について、留学生に的を絞った International Enrollment Management というのが導入されています。これは本日時間がなかったので話しませんでした。今後はこういうことも含めて、留学生の入学選抜を考えていく必要があると思います。

それからアメリカをはじめとする、留学生受入れの先進国の事例を学ぶときには、トップ校よりも地方の大学のほうが参考になると思います。不利な条件を克服して留学生の獲得に成功している事例のほうがより学べると思います。

【小路】 また、留学先を選択するにあたってロコミというのは重要だと思います。ロコミというのは、人が間に入っているのです、その分だけ評価が絡んでいると思います。

【太田】 例をあげますと、アメリカの大学が行っているのは、在学中の留学生の活用です。私がいた大学では、在学中の留学生が国別にチームをつくって、合格者に電話でアプローチすることをしています。International Admissions Ambassador Program と呼ばれています。このプログラムの特徴は、在籍留学生が留学希望者に対して直接コンタクトして、手続き率をあげられる可能性があることです。口コミを制度化する手法と言えるかもしれません。アジア各国の在籍している留学生は、このような取り組みを競争としてとらえる傾向が強いので、勧誘により力が入ります。ただし、留学生自身が直接コンタクトして、母国の留学希望者に薦められるような大学づくりをしていなければ、逆効果になると思います。

— 了 —